

## 《第 46 号》「帰れる実家と走れる自然」

西垣内義則(NPO 法人グリーンコンシューマー東京ネット元理事)

今年の夏は 2 ヶ月ほど北海道の実家に帰省しました。86 歳になる母が一人で暮らしています。今まで「元気!？」と電話で話したり、冠婚葬祭で数日帰省する程度でした。3 年前に定年退職してやっとまとまった時間をとれるようになったので、母と過ごすために実家に帰ったのです。行く前は 2 ヶ月も母と二人で過ごせるかな、と心配があったのですが、終わってしまうとあつという間でした。

母のライフスタイル、友だち関係、月単位・週単位で楽しみにしていること、食事の好き嫌いなどいろいろわかりました。母も私のことを知ったでしょう。子どものころ 18 年間しか同居していなかったのが、今回 2 ヶ月共同生活することで親子の絆が深まった感じです。

実家では毎朝のようにランニングをしていました。朝 3 時には明るくなり始めます。ですから早朝 4 時頃から 10 キロ、20 キロと走っていました。北海道の自然を感じ、田畑の中を気持ちよく走ってきました。そんな時に走りながら思ったことは、福島の子原子力発電の事故でいまだに帰れない人たちがいる、大変な生活環境で頑張っている被害者の方々がいるということです。どう考えても、安全をコントロールできない技術レベルでモノを動かし、現実に事故を起こし、今生きている住民のみならず未来に生きる人たちにも不安と生活基盤の変更を余儀なくさせている政府と電力会社に憤りを感じざるを得ません。

私にとって走ることは現実を考えさせるエネルギーでもあったのです。

以上